2010年台北・新北市長選挙の考察
――台湾北部二大都市の選挙政治――

小笠原　欣幸

はじめに

2010年11月27日，台湾の五大都市で市長選挙の投開票が行なわれた。台湾では地方自治制度の改革があり，従来から直轄市であった台北市と高雄市に加え，台北県（昇格後の名称は新北市），台中県市，台南県市も昇格し，五つの直轄市（略称：五都）が誕生し，五都の市長を決める選挙が一斉に行なわれた(1)。

台湾政治は中国国民党（略称：国民党）を中心とする泛藍陣営(2)と民主進歩党（略称：民進党）を中心とする泛緑陣営(3)の二大陣営（略称：藍緑）の対立構造を特徴とするが，地方における政党の支持構造はそれぞれの地方で異なっている。市長選挙は，中央と地方の政党支持構造の特徴が交錯する重要な政治現象であり，台湾政治の理解に向けて，総統選挙のような全国レベルの選挙とは異なる角度からのアプローチとなる。

五都の中で，北部に位置する台北市と新北市（略称：北二都）は，台北市が台湾の首都機能を，新北市が台湾最大の人口を擁し，それぞれ影響力が大きい。馬英九政権に対抗する民進党の二人の有力者蔡英文と蘇貞昌が出馬した点でも両市は注目度が高い。本稿では，2010年の台北市長選挙と新北市長選挙の事例を深く掘り下げ，北二都の政党支持構造，二大陣営の候補者決定過程および選挙戦略，選挙民の投票行動の変化の有無を分析し，台北市と新北市の選挙政治の特徴を描出する(4)。

1．台北市の支持構造と候補者決定過程

(1) 国民党の状況

台北市は首都として情報の発信力があり，一地方でありながら注目の度合いと影響力は非常に大きい。民選後の総統（李登輝，陳水扁，馬英九）は，すべて台北市長経験者である。しかし，その社会構造は台湾全体から見ると特殊である。平均的な台湾の県市と比較すると，台北市は，①第二次世界大戦後中国大陸から渡ってきた外省人および外省人第二世代・第三世代の比率が高い，②公務員・軍・教育関係者の比率が高い，③一人当たりの平均所得が高い，という特徴がある。台北市の政治動向は重要ではあるが，必ずしも台湾全体の先行指標になるわけではない。台北市長選挙とその直後に行なわれた総統選挙との関連を見ると，過去４回で双方の当選者の党籍が一致したのは１回だけである。

台北市長選挙の基本構図は，馬英九以来続く国民党の市政を市民がどう判断するか，そして，基礎票で劣る民進党候補がどのような選挙戦を展開するのかであった。郝龍斌（58歳）[(5)]は，1952年８月22日台北市に生まれた外省人第二世代である。父親郝柏村は軍の代表的人物で，参謀総長，行政院長を歴任した。台北市で育った郝龍斌は，閩南語で演説することはできない。郝は，李登輝時代に国民党を離党して「新党」を結成し，同党公認候補として立法委員に当選した。陳水扁政権期には環保署署長（環境庁長官に相当）に就任した（2001年３月～2003年10月）。陳の「全民政府」の呼びかけに応え入閣したのだが，このことが後に泛藍陣営内部の政敵から繰り返し攻撃される材料になる。2006年，郝は国民党に再加入し，馬英九台北市長の後継候補を決める党内予備選挙で，丁守中，葉金川らと争い公認を勝ち取った。だが，馬の意中の人物は郝ではなかったと見られている。郝は同年12月の台北市長選挙で，民進党の謝長廷，無党籍の宋楚瑜らを破って当選した。

郝市長の実績としては，捷運（都市高速交通路線）の整備拡大（文湖線・蘆洲線の開通），市内道路の補修，台北松山空港の活性化，内湖・南港地区開発，下水道整備，淡水河整備，市政に関するあらゆる要望・苦情を受けつける専用電話の設置，デフリンピック開催（2009年９月）などが挙げられる。しかし，市民の評価は厳しいものであった。『中國時報』の2009年１月の調査によると，郝市長の満足度は全25県市の首長の中で22番目の評価であった。『天下雑誌』の2010年８月の調査では21番目の評価であった(6)。他のメディアの調査でも，郝市長への評価はおしなべて低かった。

郝市長の満足度が低い理由としては，猫空ロープウエーや捷運文湖線の運行トラブル，道路補修工事がもたらす交通不便など市政執行上の問題に加え，側近重視の市政運営，指導力不足，市民との交流不足など市長としての資質が疑問視されたことが影響したと考えられる。しかし，市政満足度は低くとも選挙になれば郝の再選は間違いないというのが一般的判断であった。台北市は国民党の基礎票が固い地区で，国民党が分裂しない限り同党候補の当選は確実である。郝の市政運営に対しては国民党支持者にも失望感があり，党内の一部から問題視する声が上がっていたが，大きな動きにはならなかった。郝は比較的楽に再選の選挙に臨むことができた。郝陣営は先を見据えて，馬や党中央には頼らず自前の選挙戦を展開するつもりでいた。

台北市で国民党は固い基礎票を有している。市内の立法委員選挙区８つは，すべて国民党の議席である。市議会は，全52議席のうち国民党24，新党４，親民党２，民進党18，台聯２，無党籍２で，泛藍陣営が多数を占める。《表１》は，台北市における過去３回の市長選挙と総統選挙の投票結果を泛藍陣営と泛緑陣営の得票率にまとめたものである。1998年市長選挙の馬英九と王建煊，2000年総統選挙の連戦，宋楚瑜，李敖，2006年市長選挙の郝龍斌，宋楚瑜，李敖をそれぞれ合算し泛藍陣営とした。泛緑陣営は民進党のみである。2002年市長選挙，2004年総統選挙，2008年総統選挙は二党の公認候補による１対１の争いであっ

《表１》台北市における藍緑陣営の得票率

	泛藍陣営	泛緑陣営
1998年市長選挙	54.10％	45.91％
2000年総統選挙	61.81％	37.64％
2002年市長選挙	64.11％	35.89％
2004年総統選挙	56.53％	43.47％
2006年市長選挙	58.56％	40.89％
2008年総統選挙	63.03％	36.97％

※属性を判別できない候補の得票は除外。
（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

た。民進党の得票率の最高値は，陳が再選を目指して失敗した1998年市長選挙時の45.9％である。一方，最低値は，馬の市長再選に挑戦した李應元の35.9％である。３回の総統選挙の数値もこの枠の中に入っている。台北市の泛藍陣営の支持構造は安定し，民進党候補が１対１の選挙で勝ち越すことは非常に難しいことがわかる。前回市長選挙で謝長廷の得票率が40.9％であったことに「意外によかった」という反応が出たのはこのような背景があるからである。

（2）民進党の状況

民進党内で台北市長選挙に名乗りを上げたのは蘇貞昌（63歳）であった。蘇は，1947年７月28日屏東県に生まれた。父親蘇啓東は屏東県政府に勤める公務員，母親江清蓮は小学校の教師をしていた。両親とも日本統治時代から台湾に居住していた本省人である。台湾大学法律系を卒業し弁護士となっていた蘇貞昌は，1979年の美麗島事件（反体制運動弾圧事件）の弁護を引き受けたことから反国民党の運動に参加し，台湾省議員を経て，台湾の南端の屏東県と北端にあたる台北県の二つの県長を務めた。陳政権期には，民進党主席（2005年１月～同年12月），行政院長（2006年１月～2007年５月）を歴任した。2008年総統選挙で陳の後継候補を目指したが，党内予備選挙で謝長廷に敗れた。2008年以

降は，蔡英文主席の党運営に協力しながら影響力を養ってきた。

2012年総統選挙を目標にしていた蘇は，2009年12月の台北県長選挙に出馬し，それを足掛りに総統選挙に駒を進める計算であった。行政院長を務めた人物が県長に復帰するのは異例であるが，民進党を再建していくためにもよいと考えたのであろう。民意調査では蘇が現職の周錫瑋県長を圧倒していたので，蘇が台北県長に当選する可能性は高かった。しかし，馬政権が地方制度改革を行ない，台北県は新北市という名称の直轄市に昇格し，首長選挙は１年先送りとなった。

この昇格がなければ，蘇が台北県長に当選した場合，2009年12月の就任から2012年３月の総統選挙まで２年以上の時間があった。仮に総統に当選し県長を辞任することになっても，残り任期が２年を切っているので内政部が代理県長を派遣すればよい。ところが，新北市の市長は2010年12月の就任なので，総統に当選したら１年半で市長を辞任しなければならないし，しかも，市長の補欠選挙が必要になる。市長選挙で市の発展を語っておきながら当選したらすぐに総統選挙の活動ということでは市民の理解を得るのは容易ではない。かといって，勝てそうな選挙で落選したのでは総統選挙の出馬もままならなくなる。

蘇は新北市長選挙に出れば，勝っても負けても総統選出馬が難しくなるというジレンマにとらわれることになった。民進党内では，蘇が新北市長選に出馬し五都のうち三都を確実に取ることへの期待が高まっていたので，黙っていればそこに追い込まれる状況にあった。一方，台北市長選に出馬した場合は，惨敗すれば政治生命が絶たれるが，善戦すれば当選できなかったとしてもかつての陳と同じように総統選挙に出馬する道が開ける。当選した場合は民進党にとっての救世主となるので，総統選出馬コールが起きればそれに呼応してもよいし，行政権限の大きい台北市長を４年やるのも悪くないと計算することができた。つまり，台北市長選に出れば，リスクはあるが勝っても負けても政治的可能性が開けてくるのである。相手は不人気の郝であるから，蘇陣営にとって

はチャレンジしたくなる賭けであった。

しかし，蘇が台北市に出たため民進党が新北市で有力候補を擁立できなくなり，台北市も新北市も両方敗北する可能性があった。その場合は選挙後蘇への逆風となる。新北市には勝てそうな候補，つまり蔡英文を押し込むことがこの賭けの必要条件であった。蘇の潜在的ライバルとなる蔡は，当初党内で初心者扱いされていたが，2009年９月の雲林県立法委員補欠選挙で勝利したところから主席として求心力を高め，県市長選挙とその後の立法委員補欠選挙での躍進を経て，2012年総統候補の本命という見方が台頭してきた。蔡が台北市長選への出馬を検討しているという観測もあった。蔡は，自身の出馬については態度を明らかにしていなかったが，党主席として五都選挙の戦いを主導するつもりでいた。

蘇は，2010年３月３日，蔡の機先を制する形で台北市長選挙の出馬宣言をした。蘇は，台北市では国民党市政が12年続き市政が停滞しているとして，生活を大事にしたいという人民の期待に応え，市民に選択肢を提供するため，台北市長選挙に出馬すると表明した。新北市に出ない理由としては，同一の県市で３期以上首長をやるべきではないと考えるからと説明した。この出馬宣言に刺激され，民進党はいきなり「オレがオレが」の出馬宣言ラッシュとなった。台北市は，蘇の他に，陳師孟（元総統府祕書長），周柏雅（台北市議員）が出馬表明をした。新北市は，游錫堃（元行政院長），陳景峻（元立法委員），尤清（元台北県長），周慧瑛（元立法委員）らが出馬を表明した。蔡主席が抑えていた党内ポジション争いの蓋が開いてしまったのである。

蘇陣営は蔡を新北市に押し込むことができると判断し見切り発車で出馬に動いたのだが，それは蔡との関係悪化というリスクを内包していた。蘇本人および蘇の幕僚グループは，先行しながら巧妙な謝長廷に出し抜かれた2008年の予備選挙がトラウマになっていたと思われる。この敗北の経験を教訓として，彼らは待ちの姿勢ではなくリスクを冒して攻める姿勢に転じたのであろう。だが

それは，蔡にとっては行動を指図されることに他ならなかった。蔡は，自分が主導権を握っているように見えても隙を見せれば瞬時に党内の権力ゲームが動き出す，という駆け引きの怖さを思い知らされることになった。結果的に，この時の蔡と蘇との行き違いがしこりとなって，両者は2012年総統選挙の党公認候補を目指して党内予備選挙でぶつかりあうことになった。

２．新北市の支持構造と候補者決定過程

（1）国民党の状況

国民党は台北県（現新北市）で苦境に陥っていた。現職の周錫瑋県長の評価は低空飛行を続けていた。周錫瑋（52歳）は，1958年３月11日彰化県に生まれた。父親周書府は大陸から渡ってきた職業軍人で，後に立法委員を務めた。周錫瑋は外省人第二世代であるが，閩南語の演説はかなり流暢である。周は1994年に台湾省議員に当選し政治家としてのキャリアを開始，1998年には台北県第一選挙区から立法委員選挙に出馬し当選した。2000年総統選挙では宋楚瑜を支援しその後親民党の結党に加わり，2001年と2004年の立法委員選挙は親民党候補として当選した。しかし，2005年台北県長選挙に出馬するため国民党に戻り，予備選挙で公認を勝ち取り，12月の本選挙で民進党の羅文嘉を破って県長に就任した。

台北市に隣接する都市部と旧来の農漁村とが併存する台北県の統治はただでさえ難しい。周県長に対しては，様々な観点からの批判があった。県政府の人事で親民党関係者が多く配置されたことへの疑問があったし，一部県政府幹部のスキャンダルもあった。県政の執行で地元とのコミュニケーションを欠いた事例もあった。立法委員時代の癖が抜けずにパフォーマンスに走り，中央政府を声高に攻撃したり県政府内の部局を批判したりするという指摘もあった。当選後は支持者へのあいさつをしなかったとか，県内の郷鎮市の首長をないがし

ろにしたという陰口もあった。メディアとの関係がうまく築けなかったことも指摘されている。周の言動は，メディアでたびたび誇張して伝えられた。例えば，台北県の山に虎が出たという通報を真に受け視察に出かけたことが「県長の虎狩り」としておもしろおかしく繰り返し報じられた。

いくつもの要因が重なった結果，あらゆる民意調査で周県長の満足度は低迷し，台湾の県市長の満足度ランキングでいつも台東県の県長と最下位を争う状況になった。周は再選への強い意欲を示していたが，民意調査では民進党が誰を出馬させても周を上回った。政権与党高層は周を１期だけで降ろそうと試みたが，周はそれをはねのけ再選の意思表示を一層強くした。台北県は台湾最大の人口を擁する自治体であり，ここで県政を失えば馬政権への打撃となる。政権与党高層は，2009年12月の県市長選挙で蘇が台北県長選挙に出馬すれば，「領頭羊（群れの先頭に立つ羊が他の羊を引っ張る）」ように他県市の民進党候補を牽引し，その結果国民党が敗北することを恐れた。危機感を抱いた政権与党は，五都昇格という制度変更の煙幕の中で選挙を１年先送りにした[(7)]。

こうして時間を稼いだものの，周県長の支持率低迷は変わらなかった。政権与党高層と周との水面下の攻防が続き，周側も簡単には降伏せず，国民党県議が周の再選出馬を求める署名活動を始めるなど反撃も見せた。政権与党高層の危機感は2009年12月の県市長選挙の不振でいよいよ強まり，ついに周降ろしを決断した。仕掛けの手段は，国民党系の新聞に内部の民意調査の数字を漏らしたり，周は入閣するらしいとか，新北市長選挙には○○○が出馬するらしいとかの情報を流したりすることであった。○○○は，朱立倫であったり県選出の立法委員であったりした。これを何度もやられると民意調査の数字は上がりようがなく，ボディブローのように効いてくる。周は徐々に追い込まれていった。旺旺中時が2010年２月３日－４日に行なった民意調査では，蘇の支持率51％に対し周は22％であった[(8)]。最後は，政権与党高層が朱の擁立を決めたことが決定打となった。県議の多数は周についていたが，周にはもはや挽回の手は残っ

ていなかった。2010年２月22日，周はついに不出馬を発表した。周は「各種の手段によってリンチされるくらいなら，きっぱり不出馬した方がよい」と語ったとされる[9]。

朱立倫（49歳）は，1961年６月７日桃園県に生まれた。父親朱樟興は大陸から渡ってきた職業軍人で，退役してから桃園県議員，国民大会代表を務めた。朱立倫は子供の時に，桃園県大溪の母親の実家と同県八德の眷村の両方の生活を経験した。母親の実家は祖母を中心とした本省人の大家庭で，朱は自然に閩南語ネーティヴとなった。朱は，通常の分類では外省人第二世代となるが，「（本省人の）祖母に対し孫（朱立倫のこと）が外省人だと言って，祖母がどうしてそれを受け入れることができようか」という言い方でそうした族群の分類に異議を唱えている[10]。

朱の妻の実家は台南の政治家族で，岳父高育仁は台南県長および台湾省議会議長を務めた。朱は，台湾大学工商管理系を卒業後，ニューヨーク大学で金融，会計学を専攻し，修士号，博士号を取得，帰国後台湾大学で副教授に就任した。37歳で桃園県選挙区の立法委員に当選，40歳で桃園県長に当選し，順調な政治経歴を歩んできた。

朱立倫は当初新北市長選挙出馬に乗り気ではなかったが，しだいに外堀を埋められた。2009年９月の内閣改造で，朱は桃園県長から行政院副院長に転じていた。このポストは行政院長にも副総統候補にも道が開けるので，この布石は馬が朱を後継候補と考えている証と見られた。他方，新北市長のポストは馬後継の地位を固める上で逆に有利だという見方があるが，一旦新北市長に当選すれば１期だけで退任するのは不自然であるし，民進党に市政を奪われるという理屈もあり，2014年に再選をかけて市長選挙を戦わなければならなくなる可能性が高い。再選されれば，任期途中で2016年総統選挙に出馬するのは難しくなる。こうした事情があるので，本来なら馬は，人事のカードとして朱を行政院副院長ポストに置いておきたかった。しかし，新北市で出馬できる人材として

は朱が党内の最強の候補であった。馬としても，自分の再選に黄色信号が灯り背に腹は換えられなくなったので，有力なカードを一枚手放し，朱を新北市に投入することに決めた。朱としても，馬が再選に失敗しては元も子もなくなる。結局，馬と朱は運命共同体ということになった[11]。

周が再選不出馬を表明した直後，朱対蘇，朱対蔡を想定した民意調査が行なわれている。民進党の候補が蘇であるなら，朱の支持率38％に対し蘇の支持率は44％であった。しかし，民進党の候補が蔡であるなら，朱の支持率48％に対し蔡は30％で，朱がリードした[12]。つまり，民意調査では，蘇貞昌＞朱立倫＞蔡英文という強弱関係が成立していた。朱にとっては，相手が蘇ならば非常に厳しい戦いになるが，蔡ならば十分戦える状況であった。

（2）民進党の状況

先手の蘇貞昌が台北市を「取った」ことで，後手の蔡英文は非常にやりにくい局面になった。党内では蔡が新北市に参選することを期待する声が高まってきたが，蔡は決断しなければならない選挙が三つもあった。一つ目は党主席選挙，二つ目は五都選挙，三つ目が総統選挙である。総統選挙はまだ先であるが，党主席選挙と五都選挙をどうさばくかでその後の可能性は大きく変化する。２年の任期切れを控えた党主席選挙は５月に迫っていた。党内の一部長老からは党主席のポストを四天王[13]の誰かに明け渡すよう求める声もあった。

蔡は五都選挙に向けて党内の意見調整を進め，公認候補は話し合いを原則とし，それができない場合は党員投票ではなく民意調査で決めること，５月を期日とすることという大枠をはめ，党内対立を押さえ込む努力をしてきた。その最中に蘇に機先を制されたので，蔡としては相当の不快感があった。蔡にとって新北市長選挙は，蘇と同じく当選すれば総統選挙へ出にくくなるし，出たからといって勝てるとは限らないので蘇より大きなリスクを負わされることになる。このような蘇に設定された枠組みに従いたくはなかった。蔡は，３月24日，

党主席の再選を目指すこと，現段階では党主席と候補者の身分を兼ねることはできないと考えるから五都選挙には出馬しないこと，を表明した[14]。

蔡の不出馬表明により，民進党は五都の候補を決めることができなくなった。民進党は，党内に９人の委員から成る公認候補指名委員会を設置し，そこに指名の権限を委ねた。メンバーは党内の各派各勢力を網羅していた。蔡は主席であるが指名委員会のメンバーではなかった。委員会は内々に蔡に出馬を求めることで一致していたが，軽々に動けば蔡に拒否される可能性もあったので慎重になっていた。蔡が出ない場合の新北市の公認候補は游錫堃になる予定であったが，それでは当選の可能性は低く，民進党の士気が上がらないことが予見できた。

膠着状態のままタイムリミットの５月が近づき，党内にあせりの色が見えてきた。台北市長選出馬宣言をした蘇に再考を求める声，蘇の独断を批判する声も上がった。蔡は不出馬の態度を維持したままぎりぎりまで成り行きを見守り，最後は党主席の再選を経て党内から熱い蔡コールが上がる中で出馬を宣言した。党内は安堵と喜びの声に包まれた。蔡は結果として蘇の枠組みに応じたが，プロセスではそれなりの意地を示した。市長に当選した場合の対応について，蔡は「最後まで責任を負う」という言い方をした。これは蘇の「当選したら任期いっぱい務める」という公約，朱の「当選したら決して別の場所に行かない」という公約と比べると，将来の転進の余地を残した発言と解釈された。

蔡英文（54歳）は，1956年８月31日台北市に生まれた。父親蔡潔生は客家系本省人で，当初屏東県で自動車修理工場を営んでいたが，後に台北に出て不動産投資で成功し，大資産家となった。蔡英文は，幼少の時から非常に裕福な環境の中で育った。現在リージェントホテルが建つ台北の一等地にあった蔡家の家の庭ではバスケットボールができたという[15]。2006年に逝去した蔡潔生の墓苑は台湾で一二を争う広さであったが（敷地面積1700㎡），殯葬管理條例が定める墓の広さ規制に違反しているとして，蔡家は台北県政府から罰金450万

台湾元の行政処分を受けた。

台北市で育った蔡は，客家語は話せないし，閩南語もうまくはない。蔡は台湾大学法律系を卒業後，コーネル大学，続いてロンドン大学LSEで国際法を専攻し，修士号，博士号を取得，帰国後政治大学副教授に就任した。李登輝政権で国家安全会議の諮詢委員に登用され，台湾と中国との関係は「特殊な国と国との関係」だとする二国論の立案に参与した。陳政権第１期では大陸委員会主任委員（閣僚）を務め，その後2004年に民進党に入党し，比例区選出の立法委員を経て，陳政権第２期の蘇貞昌内閣で行政院副院長（副首相）を務めた。

蔡と朱の経歴には，海外で博士号取得，帰国後大学教員を務め，その後立法委員，行政院副院長を歴任したという共通点がある。クールでクリーンなイメージも共通する。地方行政では桃園県長を２期務めた朱に，中央行政では閣僚を５年以上務めた蔡に分がある。両者とも台北県の出身ではないし，この選挙のために台北県（朱は三重市，蔡は永和市）に住所を移したことも共通する。しかし，選挙の経験では差があった。朱は立法委員選挙で選挙区にて当選，県長選挙で当選・再選の豊富な選挙経験があるが，蔡は立法委員の経歴はあるものの拘束名簿式の比例区選出なので，自分で運動をする選挙は初めてであった。国民党は周を降ろすことで県政の負の評価のリセットに成功したので，市長選挙の争点は，この二人の候補の優劣になった。

台北県は，旧来の農漁村の住民，退役軍人・公務員・教員の住民，それに県外から流入してきた大量の新住民がいる。県内には台商（中国ビジネスに従事する台湾企業・台湾商人）も多い。国民党の固定票地区，地方政治家族が影響力を行使する地区，民進党の固定票地区が混在し，台湾の政治社会の縮図を形成するが，台湾全体よりは泛藍陣営が強い。《表２》は，過去３回の県長選挙と総統選挙の結果を集計したものであるが，民進党が泛藍陣営を上回ったのは2001年に蘇が県長に再選された時の１回だけである。この時の数値を除くと，泛藍陣営は県長選挙でも総統選挙でも安定した強さを見せている。

《表２》新北市における藍緑陣営の得票率

	泛藍陣営	泛緑陣営
1997年県長選挙	59.33％	40.67％
2000年総統選挙	62.75％	36.73％
2001年県長選挙	48.16％	51.31％
2004年総統選挙	53.06％	46.94％
2005年県長選挙	54.87％	44.30％
2008年総統選挙	61.06％	38.94％

※属性を判別できない候補の得票は除外。
（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

台北県には立法委員の選挙区が12あるが，国民党が10議席，民進党は２議席である。県議員65名のうち国民党・親民党籍は33名，民進党・台聯籍は19名，郷鎮市の首長29名のうち国民党籍は18名，民進党籍は３名であった。台北県には県全体を包括する地方派閥はないが，郷鎮市ごとにいくつかの有力政治家族がいて，複雑な政治関係を形成している。このため過去の県長選挙では泛藍陣営が分裂選挙になり，民進党が漁夫の利を得ることが何度かあった。しかし，１対１の戦いでは民進党の勝ち目は薄い。蘇が民意調査で高い支持率を得ていたのは極めて異例の現象であり，蘇への高い個人的評価があったことを示している。

３．台北市の二大陣営の選挙戦略

蘇貞昌が出馬表明をした2010年３月は，馬政権の満足度が低迷し，立法委員補選で民進党が連勝するという状況にあった。しかし，民進党の党勢回復はまだ途中であったし，党の政策も打ち出せていなかったので，選挙の専門家の多くは馬再選の可能性が高いと考えていた。民進党は強力な牽引力を必要としていた。各メディアの民意調査では，蘇が民進党内の最有力者ということで一致

していた。蔡英文は，蘇の出馬をめぐる政治的駆け引きで脇の甘さを感じさせたし，４月25日に行なわれた馬とのテレビ討論会のパフォーマンスもあまりよい出来ではなかった。このため，民進党で馬に挑戦できる人物は蘇という流れが強まっていた。

蘇陣営の選挙戦略は，市長選挙で善戦する，総統選挙につながる戦い方をする，の二点であった。善戦の目安は，謝長廷の得票率40.9％を上回り陳水扁の45.9％に近づけることであった。陳を越えれば「大勝利」である。蘇は，メディア戦略をよく研究し，30代の若いスタッフを活用し，情報発信を重視する選挙戦を展開した。それは，３月３日の鮮やかな出馬宣言からスタートした。蘇陣営は，旧来の台北を越えていきたいという願望を込めた「台北超越台北」と，オバマが大統領選挙で使った「改変（チェンジ）」とを組み合わせて選挙のキャッチフレーズとした。蘇陣営は，民進党の枠を越えて中間派の票を取りに行くため，国内では藍緑の対立構造からの脱却を志向し，また，対中関係でも安定を志向する中間路線を主軸に据えた。

2010年前半の台湾政治の焦点はECFA（中台間の経済協力枠組み協定）であった。郝龍斌および国民党は，繰り返しECFAで蘇への攻撃を仕掛けた。蘇は，メディアのインタビューでは，中国と規範を結んでもよいと考えるがECFAの内容と手続きには問題があるので反対であるとはっきり述べていたが，選挙活動ではECFAにほとんど触れなかった。統一独立問題や族群問題も触れなかった。蘇は，12年続いた国民党市政は硬直化しているとして，もっぱら市民生活に直接かかわる諸問題を取り上げた。台北市の住宅価格高騰については，市内国有地の払い下げが財団ファンドの地価吊り上げにつながっていると批判し，市が主導して社会的弱者に向けて「社会住宅」を提供していくと語った。市内の交通問題では，忠孝西路のバス専用道路，敦化南北路の自転車専用レーンなど郝市長の交通政策を具体的に批判した。また，台北県長時代の実績として板橋地区の都市開発に頻繁に言及し，隣接する台北市の萬華地区の再開発の

遅れを批判した。

蘇貞昌の出馬は蘇派の独断であったので，序盤は謝長廷派や他派から揺さぶりがあったが，蘇の勢いが増すにつれ党内の雑音は収まり，支持・期待が高まっていった。蘇が党の政策の解釈権を行使する場面も見られた。それは台北市の松山空港についてであった。中央政府の航空政策により松山空港は国内線，桃園空港は国際線という区分けが長らく維持されてきたが，台湾新幹線の開通により国内線は減便となり松山空港は縮小の流れにあった。しかし，馬英九は市の中心部に位置する松山空港の利便性に着目し，東アジアの大都市市内空港と結ぶというコンセプトを掲げた。郝もそれを継承し，松山空港は両岸直行便，そして東京羽田線も就航することになった。民進党は陳水扁および李應元と謝長廷（共に市長選挙に立候補）が，桃園をハブ空港として発展させ，松山空港は移転し（事実上の廃港），跡地は市民の憩いの場として整備，周辺はビルの高さ規制が解除されるので高層化し再開発するという青写真を語ってきた。しかし，蘇は「自分は実務的な人間である。相手が主張しているからといって反対することはしない」として，事実上，馬・郝の松山空港政策を肯定し，民進党の青写真を否定する発言をした[16]。郝陣営はこの議題で攻勢に出ようと手ぐすねを引いていたが，蘇の一声で，松山空港政策は市長選挙の争点から消えた。

蘇陣営は意識して対決ムードを避けたので，選挙戦は平穏に進行し，盛り上がりに欠く感もあった。また，蘇陣営は選挙用の大看板や旗をやめると宣言したので，台北市内は台湾の選挙らしくない普段どおりの光景であった。蘇陣営は序盤・中盤戦では大型集会を行なわず，市民との対話の場と位置づけたミニ集会に活動を集中した。３月末から８月末の間に蘇はミニ集会を240回こなしたという[17]。８月２日，筆者は蘇のミニ集会の一つを観察した。この日の集会は再選を目指す台北市議員簡余晏の応援という形を取った。会場の市議の事務所は20人も入ると一杯であったが，近所の住民50人ほどが押しかけ熱気に包

まれた。蘇は自分の政治活動を振り返るビデオを見せて，政治家としての信頼感と統治能力をアピールした。30分ほどの演説では馬政権の対中政策やECFAには一言も触れなかった。大型演説会では見られない質疑応答の時間もあった。熱帯夜のミニ集会は，蘇の独演により楽しさ溢れる「エンターテインメント」と化していた。この分野での蘇の能力は傑出している。

一方，郝陣営の選挙戦略は，藍緑の対立軸を鮮明にして基礎票の優位を活かすことであった。同時に行なわれる市議会議員選挙と里長選挙で国民党が圧倒的に優勢であることも郝に有利であった。郝陣営は「台北起飛」をキャッチフレーズとした。郝がパイロットとして台北を離陸させるという意味である。郝は守りより攻めを重視し，「台北はますますよくなっている」「蘇貞昌には政策がない」と強調し対決姿勢を取った。郝陣営は，立法委員や評論家を集めて「蘇打小組」というチームを作り，対中政策の問題から蘇の過去の実績批判に至るまで幅広く蘇攻撃を仕掛けた。だが，ネガティブキャンペーンの効果は上がらず，逆に郝は足を滑らすことになった。

郝の市政は大失敗があったわけではないが，小さなトラブルは多発していた。攻撃に集中するあまり，市政の足元を固め市民に説明する努力は疎かになった。郝は市の公務員系統の受けがよいと言われたが，その反面馴れ合いの関係も指摘され，市政府の「ネジが緩んでいる」という批判は広がりがあった。中央政府に公務員給与の引き上げを求める考えを示したことも固定支持層を念頭においたパフォーマンスとして議論を呼んだ(18)。側近を目立たせる独特のリーダーシップの問題も早くから指摘されていた。4年に一度の選挙は市の運営を検証する機会なので，当然諸問題が表面化してくる。蘇陣営が捷運の運行トラブルや粗雑な道路工事の問題など細かい議題を取り上げる選挙戦術に徹したことで，郝の市政運営に焦点が合わさった。藍緑対決構造にとらわれない政策議論を期待する声は，台北市民の中に確かに存在したのである。

蘇陣営のイメージ重視のソフトな選挙戦術も成果を上げた。蘇のピンクのポ

ロシャツ，陽気なミニ集会，ロックバンドの演奏を組み入れた集会スタイル，政治家の宣伝らしくない広告ビデオ，You Tube やブログを使った発信は評判を呼び，民進党の核心的支持者から周辺の支持者へ，そして台北市だけでなく台湾全体へと広がり，「チェンジ」のイメージと中間路線を広くアピールする大きな貢献をした。各メディアの民意調査では，郝と蘇の支持率が五分五分になる局面が出現した。台北市の藍緑の勢力比率からすると考えられない展開になってきた。全国的注目を集める首都決戦で，蘇が郝と互角あるいはそれ以上の戦いを演じたことが，五都全体で民進党支持者の気勢を引き上げる効果をもたらした。また，同一の地方自治体で３期目をやるべきではないから新北市には出馬しなかったという蘇の理屈づけは，台中市で市長をすでに２期務めている胡志強に強烈な圧力をかけることになった。こうして中盤戦は民進党有利の情勢となった。蘇陣営の作戦は当たったのである。

しかし，台北市長選挙はここで転機を迎えた。民進党の市議員らは，市政府の公共事業および11月開幕の国際花博覧会の経費の無駄遣い問題を取り上げ，郝市政批判に集中していた。８月19日，民進党市議が，新生高架道路下の用地美化のため植生されたツツジが不当に高い価格（市価一株42台湾元のものが345台湾元）で納入されたと暴露した。民進党市議らは無駄遣い批判の材料を探していてこのツツジ価格の問題を見つけ，それが「花」にからんでいたので花博批判と結びつけた。これは確かに政治的動機が背後にあるが，市の予算の執行に市議が監視の眼を向けるのは当然である。市政府はていねいな説明を怠り，高飛車な反論に出て反感を買った[19]。やがて市の内部調査で，植え込みの花だけでなく高架道路改修工事全体で調達価格が高いことが判明した。市は事務処理上のミスと説明したが，この公共事業発注をめぐり検察が利益供与の容疑で捜査を開始し，９月７日，発注担当の市政府職員と業者の身柄を拘束した。郝の選挙情勢は谷底に転落した。藍系の評論家の周玉蔻はブログに「大勢已去！？（もうだめではないか）」と書いたほどである。

郝市長は，不祥事の謝罪と捜査への協力を表明したが，批判は野党からだけではなく，与党の身内からも出てきた。国民党寄りのメディアでも郝の資質を疑わせる話が掲載された。『中國時報』は，「潜在力を見出すのが難しい」，「首都の市長の仕事をこれほど小さいものにした」，「毎日家に帰って家族と夕食を食べ10時には寝る」という郝への陰口を掲載した[20]。『聯合報』は，ある里長が，郝市長に５回も会っているのに郝市長は自分の名前も自分が里長であることも覚えていなかったと不満げに語ったという話を書いた[21]。

あまりの批判に，郝は，側近である副市長の李永萍，市政府顧問の莊文思，市長室秘書の任孝琦の３人の解任に追い込まれた。しかし，党内で危機感が共有されるようになったことで，ここから逆に郝陣営の巻き返しが進行した。郝は，当初は自分の実績と自分の力で再選を勝ち取るつもりであったが，戦術を転換し，自分が落選すれば馬も再選できなくなるという危機カードを使い始めた[22]。郝に批判的あるいは冷淡であった泛藍の支持者に支援の意欲が戻り始めた。

民進党は藪をつついたら思わぬ獲物が出てきた成功体験から，国際花博覧会の瑣末な問題をたたき続けた。花博の会場内には飾りつけや展示の目的で普段目にする花・植物も多数納入されることになっていたが，その調達価格を調べると多くが市価より高かった。台湾の植物を紹介するコーナーの空心菜（台湾の代表的野菜）の調達価格が高いことが象徴的に取り上げられた。だが，畑でない場所に展示したり，開催時期に合わせて花を咲かせたりする手間がコストに反映されるのは仕方のないことである。この批判を突き詰めていくと，花博のようなイベントは無駄の山であるからやらない方がよいということになる。

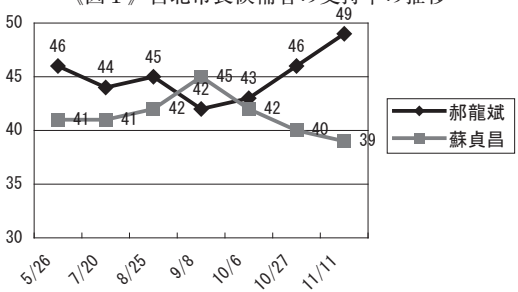
民進党は花博問題をしつこく攻撃したが，そのような些細な問題ではなくもっと自らの政策・ビジョンを語るべきだと考える選挙民も少なくなかった。加えて，台湾では国際イベントが少ないので，内容は平凡であっても「国際」と名がつけばアピールするし，多少お金をかけても盛大なイベントになること

を期待する気持ちもある。民進党がそれを否定する印象を与えたのは失策であった。蘇自身は民進党市議と距離を置き，花博覧会の見学にも行ったが，その印象を打ち消せなかった。市議および市議候補は，自分の選挙の加点を狙い花博攻撃に精を出した。その間，蘇の選挙情勢は伸び悩み，そして下降に転じたのである。

民進党は花博批判に没頭し，郝の選挙公約の矛盾も見逃した。郝は高級マンションが並ぶ都心の一等地に「社会住宅」を建設するという公約を掲げた。これは社会福祉政策を強調する民進党に対抗するためのものであるが，十分な検討を経ておらず，経済的効果が疑わしい政策であった。これをわかりやすく例えると，東京の六本木ヒルズの隣に売却予定の国有地があるのでそれを都が借り受け社会福祉政策の一環として低家賃の都営住宅を建設するという公約である。郝がこだわったのは「六本木ヒルズの隣」に建設することであった。これには国民党寄りの『経済日報』と『工商時報』が，その一等地から生まれる収益を使えば社会福祉に向ける予算が何倍も捻出できるとして郝の発想を批判した。内閣からも非現実的というコメントが出てきたが，選挙への悪影響を恐れた呉敦義行政院長が議論を封印した。民進党は型どおりの批判をしただけで，本格的な都市政策の議論には入っていかなかった。

《図１》は，TVBSが台北市の選挙民を対象に行なった「明日投票だとすると誰に投票するか」という質問への回答の半年間の推移である。TVBSの民意調査では，国民党候補の支持が高めに出て民進党候補の支持が低く出る傾向があるので，これまでの経験からすると，民進党候補のグラフは数ポイント分上方移動させると実態に近いものとなる。グラフが接近していれば民進党候補が勝つ可能性が高いのである。９月８日の調査では，蘇が郝を上回った。TVBSの台北市の民意調査で民進党候補の数字が国民党候補を上回ったのは極めて異例である。このグラフでは，７月から10月上旬の間で投票が行なわれていたら蘇が当選していたと考えられるが，10月下旬以降は郝のリードが明確になった。

《図１》台北市長候補者の支持率の推移



（出所）TVBS民意調査を参照し筆者作成。

11月６日には花博覧会が無事に開幕し，８月以降続いていた花博がらみの批判に区切りがついた。その頃には郝陣営は危機的状況を脱していた。

４．新北市の二大陣営の選挙戦略

新北市では，蔡英文と朱立倫とが対照的な選挙戦を繰り広げた。蔡は社会福祉，朱は経済発展を訴えの中心に据えた。蔡は宣伝重視の選挙戦を，朱は伝統的な足で稼ぐ選挙戦を展開した。握手した選挙民の数は，朱が蔡の何倍にもなったと思われる。朱は選挙活動を始めて３ヶ月で，台北県の29の郷鎮市，そしてその下の1032の村・里すべてを回ったと語っている。蔡は党主席を兼務しているため物理的に時間の制約があった。さらに，体力的にもペース配分を考えざるをえず，選挙活動で歩ける範囲に一定の影響があった。しかし，全国メディアで報じられる頻度では，党主席である蔡が朱を大きく上回った。蔡陣営は，メディア広告，ネット，看板，ポスターのイメージ戦略を多用し，「I ♥ New... 新幸福・新時代」というキャッチフレーズでアピールした。朱陣営のそれは「倫転新北市（新北市をうまく回転させる[23]）」というやや平凡なものであった。このように両者の選挙活動は異なる特徴を有していたので，台湾メディ

アは，朱のやり方を陸軍の戦法，蔡のやり方を空軍の戦法に例えた[24]。

台湾の選挙においては，候補者が選挙民と会う・握手する・話しかけるという接触は非常に重要視される。藍緑双方の陣営に固い支持者が多数いる反面，中間票・浮動票も少なからず存在する。支持政党・支持候補が固まっていない選挙民と直接接触することは一定の集票効果がある。筆者も実際に，握手したからその候補に票を入れた，うちの店に来てくれたからその候補に票を入れた，という事例をいくつも聞いている。朱の村・里の訪問は，村長・里長の事務所に行き，村長・里長が呼んでおいた近隣住民と朱が対話するスタイルであった。一日に何ヶ所も訪問するため対話の時間が短いという難点もあったが，お茶を飲んだり何かを食べたりするので握手以上の効果もある。ただ，村長・里長が国民党支持の住民を呼んでおくことが多いので，選挙民の反応がややずれて選対本部に伝わる現象もあったようである。

８月２日，筆者は朱の選挙活動を見学した。この日朱は台北県新荘市の視覚障害者支援施設を訪問した。まず，朱は中庭で盲導犬の訓練を見学した。この日の最高気温は中央気象台の発表で38℃であった。中庭は太陽が直射し頭が焼け焦げそうであった。筆者は３分で日陰に逃げ込んだが，朱は帽子もかぶらず熱心に職員の説明に耳を傾けていた。次に，作業室で視覚障害者の職業訓練の様子を視察した。建物内は蒸し風呂のような暑さであったが，朱の視覚障害者とのコミュニケーションは非常にうまく，見ていて感心させられた。朱は全員と握手した後，施設の玄関前で取材の記者らに福祉政策を発表し一行程を終えた。朱はこのような「訪問・面会・握手・メディア向けコメント発表」の行程を毎日数ヶ所のペースで続けていった。朱の体力・気力は相当のものである。

蔡の選対本部は，６月の時点で，主席職の激務や体力的事情を勘案し，序盤は全国メディア露出，中盤は人の多い市場・商店街で握手活動，終盤は連日大型集会という蔡に合わせた短期決戦型の三段階作戦を立てていた。蔡陣営は数ではなく効率重視で，地方人士と非公開で面会する戦術を多用した[25]。序盤・

中盤では民進党の市議候補らからは，朱と比べて蔡の選挙活動が少ないと心配する声も上がった。また，週刊誌の『新新聞』では，蔡は雨が降ると選挙活動を取りやめると書かれた[26]。この記事が事実かどうか確認するため，筆者は蔡の選対責任者に直接聞いてみた[27]。回答は，それは事実であるが，その理由は，記事が示唆するように消極的だからではなく，市場や商店街では雨が降る中で選挙活動をやるのは人の迷惑になるからとのことであった。しかし，朱は雨が降ろうが風が吹こうが選挙活動を中止していない。蔡の選挙のやり方は，台湾の選挙の常識，特に民進党の選挙の常識とは異なる。民進党の選挙戦においては，過去の権威主義体制の問題，外省人 / 本省人の省籍の問題，アイデンティティにかかわる問題が重要視されるが，それらは候補者がひたむきにアピールすることによって支持者の共感を得られるのである。民進党が得意としてきたのは，このように人々の心を揺さぶる選挙戦であった。蔡は，演説も身振りも概して冷静でおとなしかった。

台湾の選挙では，候補者や党首が意気込みを示すため「当選できなかったら辞任する」「引退する」の類の公約が飛び交う。馬英九も2005年県市長選挙で，過半数の県市を獲得できなければ党主席を辞任すると表明した。2008年には謝長廷が，総統選挙で負けたら政界から退くと宣言した。今回の五都選挙では国民党の金溥聰秘書長が，三都を取れなかったら秘書長を辞任すると公言していた。民進党の呉乃仁秘書長は，国民党に揺さぶりをかけるため辞任レベルを引き上げる発言をしたが，蔡は，選挙民が冷静に考える空間を確保したいとして，同調しなかった。蔡は，首を賭けて何かを公言する過去のやり方には戻りたくないと説明し，従来の政治家像から距離を置いた[28]。

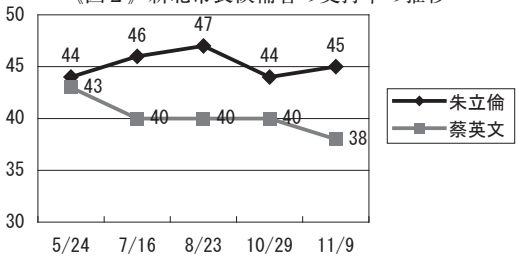
選挙公約では両者ともローカルな政策を掲げた。朱は，新北市の都市交通網の整備，中国大陸で活動する台商が台湾に回流できる拠点建設，汐止ハイテクパーク整備，基隆河岸整備などを強調した。蔡も，社会福祉，都市交通，公共空間，雇用創出を掲げた。蔡はさらに「動物に優しい都市」も訴えた。両者と

も捷運の整備拡大を唱えたが，朱は特に「三環三線（３つの環状線と３つの路線の建設)」という壮大な構想を提起した。これは国民党が得意とする大型公共建設公約である。蔡陣営は，それに対し，現実的ではない，馬政権が予算をつけていない，民進党政権の時に捷運計画は作っていたなどいくつもの理由をあげて朱の構想を批判した。蔡は建設コストを考えてバスを活用する交通政策を提示したので蔡の方が現実的であったのだが，朱の「三環三線」は新北市にとって「高すぎて買えない高級ステーキ」であると表現したため，逆に朱陣営から「夢がない」と反撃された。蔡は捷運建設に消極的という印象を与え，都市交通議題では朱が優位に立った。蔡の駆け引きに弱いところがまた露呈した。

しかし，経済議題では，馬政権が経済成長率を強調しているが庶民には実感がない，国民党は対中ビジネスと大企業ばかりを重視し富の不均衡が拡大しているという蔡の批判に勢いがあった。蔡は福祉国家・社会民主主義的な理念を強調し，かなりの手ごたえをつかんだ。朱は「市民主義」を提起した。これは民進党の理念に接近し，低所得者，生活弱者，雇用の不安定な層の票を取り合う戦略であった。その他には，国民党は，蔡のECFA反対，中華民国を亡命政府と位置づけた発言を批判したが，選挙の争点にはならなかった。

《図２》のTVBSの民意調査では，夏場は足で稼ぐ朱が一歩リードしているように見えたが，10月にはかなりの接戦になった。基礎票で優位にある朱が，蔡の追い上げに遭っていた。国民党内では，郝は危機を脱したが朱が危険な状態だという警戒感も生じた。その一つの要因は，周県長問題であった[29]。周にしてみれば，本来は自分が再選をかけて戦っているはずの選挙で朱の応援に回るということがおもしろいはずはない。周は降ろされた悔しさからか，閣僚ポストや国営企業会長ポストなど中央から提示された処遇を拒否したと言われている。周は，県政府の幹部を動かして朱の選挙を支援すると約束していたが，終盤で応援活動の手を抜いているのではないかという懸念が朱陣営内部で生じた。その懸念は現場から直接馬に伝えられた。馬は周への大変な配慮を示し，

《図２》新北市長候補者の支持率の推移



（出所）TVBS 民意調査を参照し筆者作成。

朱の応援演説でもまずは周県長の功績を称え，周をなだめた。国民党はぎりぎりのところで潜在的危機を回避することに成功した。

５．北二都の終盤戦

(1) 主要な出来事

選挙戦終盤の11月に入ると，陳水扁前総統の汚職事件の判決，緑陣営寄りの人物の失言事件など，両陣営の対立軸に沿う出来事が連続して発生した。これらの出来事は五都市長選挙全体に影響を与えたが，影響の仕方は北の二都と南の二都（台南市と高雄市）で異なった。花博覧会はすでに述べたように台北市で大きな議論を巻き起こしていたので，11月６日に開幕にこぎつけたこと自体が郝龍斌のプラスになった。実際に入場した人々の評判もそれほど悪くはなかったので，時間の経過と共に郝へのプラス作用は拡大し，花博支持で連携していた朱立倫にもいくらかのプラス効果が生じた。南二都では，花博は争点にならなかった。

陳前総統の汚職事件は複数の裁判が進行しているが，後から始まった第二次金融改革に関する収賄事件についての一審裁判で，11月５日，無罪判決が出た。

これには国民党陣営に衝撃が走った。国民党の年配の支持者の中には，裁判所の判決は総統の責任であると誤解している人が少なからず存在する。その人たちは陳水扁に恨みを抱き，馬総統が弱腰だから無罪になったという筋違いの憤りを国民党にぶつけるところであった。しかし，その数日後，最初に審理が開始された龍潭土地購入収賄事件と陳敏薫人事収賄事件について最高法院の判決が下り，陳前総統の有罪が確定した。これは，北二都では陳政権の腐敗イメージを思い起こさせ民進党に不利に作用したが，南二都ではこの汚職事件が過去のものと見なされる傾向があり，判決の影響はほとんどなかったようである。

11月７日には失言事件が発生した。緑陣営寄りで知られるテレビ討論番組の司会者鄭弘儀が，台中市の蘇嘉全候補の応援演説の場で馬政権の対中政策を批判したのだが，その際，放送禁止の下品な用語で馬総統を個人攻撃した。民進党の根っからの支持者は喝采を叫んだが，中間派選挙民には反感を抱く人もいた。下品な言葉遣いは両陣営とも珍しくはないが，放送禁止用語を使ったのは不適切であった。鄭弘儀は民進党員ではないが，国民党はこの機を捉えて，民進党は粗野であるという大々的な批判キャンペーンを行なった。鄭は失言として謝罪した。この事件は，北二都で民進党に不利に作用したと考えられる。この失言事件直後のTVBSの民意調査の蘇と蔡の数字にそれが表れている（図１と図２を参照）。しかし，南二都では民進党へのマイナスの影響はほとんどなかったし，一部では民進党陣営の気勢が上がったと考える人もいた。

投票10日前の11月17日，今度は中国で開催されていたアジア大会が台湾の五都選挙に影響を与えた。この日，広州アジア大会のテコンドーの試合で台湾期待の楊淑君選手が出場したが，一回戦の試合の途中で失格の判定を受けた。規格外の防具を使ったためとされるがその判定は不可解であり，台湾では，テコンドー界を牛耳る韓国と開催国である中国の関係者が背後で介在し優勝候補の楊選手を狙ったという憶測が広がり，台湾の女性選手が中国の試合で不当な扱いを受けたという認識ができあがった。政府のスポーツ担当者である体育委員

会副主任が早々と「(国際試合なので) 判定結果を呑み込むしかない」と発言したため，政府がやるべきことをしなかったとする批判が沸騰し，馬政権の失点となった。

ある大手メディアの民意調査担当者から聞いた話では，内部の民意調査で国民党候補にマイナス，民進党候補にプラスという形ではっきりと事件の影響が現れたという[30]。筆者が話を聞いた蘇貞昌，蔡英文，陳菊の選対本部関係者も，この事件は自候補に有利に作用していると分析していた[31]。テコンドーの判定から発した反韓・反中感情は合理的根拠が乏しいし，それは台湾の民衆もわかっていると思われるが，馬政権が中国に対し台湾の主体性を十分主張していないという疑念が背景にあったため不満の捌け口にされたようである。中国は選挙前に中台関係で事件が発生しないように注意していたが，まったく予想外の所で予想外の性質の事件が発生した。

選挙戦の終盤で各種の出来事がめまぐるしく発生するのは，台湾の選挙でおなじみの光景である。これらの出来事は，両陣営にとってプラス・マイナスが交錯し，総合的にどちらに有利に作用したのかの判断は難しい。影響は一時的であり，時間が経つにつれもとの基本構図に戻ったようにも見える。しかし，藍緑二極構造のエネルギーがじりじりと高まったことは確実である。このような動きは，藍緑の陣営間の対決を避けて候補者の統治能力と人柄を強調する選挙戦を展開してきた蘇に不利に作用した。郝はこの構図の中で巻き返し，優位を確保できた。新北市では，必ずしもこの構図は現れなかった。一方，高雄市や台南市ではこの構図が民進党のプラスになった。一つ一つの出来事が台湾の南北で異なる反応を引き起こし，それぞれの地域で国民党と民進党の強い方の支持がより強くなるという作用をしたようである。

(2) 四候補の選挙活動

投票の1週間前，筆者は北二都の候補者の選挙活動を観察した。11月21日，

郝龍斌は朝８時から民族東路の濱江市場で握手活動を行なった。ここは中山区内の民進党の支持がやや高い地区である。市場や商店街の人たちは郝が来ればニコニコ握手はするが，多くの人はそれほど喜んでいる風には見えなかった。郝は，よい人らしいという感じはするが，候補者としてのカリスマ性がやや欠けているように見えた。一緒について握手している金溥聰秘書長の方が，貫禄があってさまになっていた。

この日の午後，郝陣営は大規模な市内パレードを行なった。台北市政府前を出発し，中心部の大通りを経て，終点のケダガラン路で集会というイベントであった。２万人から３万人ほどの人が参加したので，台北の国民党は一定の動員力と結集力があることを示す効果があったと言える。事前に国民党の台北市の責任者が「藍系の支持者の投票意欲が戻ってきた」と語っていたが(32)，それが裏づけられた。しかし，イベントの主役である郝の存在感は薄かった。パレードは静かに進行し終了した。路上で「ドンスアン（当選）」の声もかかりはしたが，唱和する声は小さめであった。

ケダガラン通りの集会では，主役は候補者の郝ではなく馬英九であった。馬は，演説の冒頭でテコンドーの楊淑君事件に触れ政府の努力を強調した。次に，経済に集中して政権の実績を語り，成長率，失業率，一人当たりGDP，国際競争力ランキングのいずれもが改善したことを，数字を並べて説明した。購買力平価で換算すると台湾の一人当たりGDPが日本に並ぶという非常に細かいことにも言及した。朱も応援演説に駆けつけ，北二都の国民党の連携をアピールした。選挙期間中，郝と朱が頻繁に相互応援をし連携をアピールしたのに対し，蘇と蔡が合同演説をしたのは１回だけであった。大勢に影響しないとはいえ，多くの選挙民は北の二都が連携できるほうが好ましいと思ったであろう。

蘇貞昌の活動は，11月20日の萬華青年公園での音楽会と，21日の金華国中での大型集会の二つを観察した。前者の開催場所は，眷村を建て替えた集合住宅が並び年配の外省人住民が多い地区である。後者は，中正・大安・文山という

国民党の支持が強い地区の住民を対象に開催された。前者は土曜日の午後で，公園の一角の野外ステージは約1000人が集まり一杯になった。後者は「超越晩会」と名づけられた終盤の大型集会の一つで，会場の中学校の運動場は人で一杯になり，外には入りきれない人がかなりいた。中だけで5000人，出入りした人を入れて全体で約１万人の参加者があったのではないかと思う。

集会は，ロックバンド「董事長楽団」が蘇陣営のテーマ曲「我們要改変」を演奏し，その後で蘇が手の振りつけを参加者に教え，みんなで一緒に歌うという演出であった。蘇の演説のうまさ，聴衆を引きつける話術は，いまの台湾で一番である。蘇は，藍緑の対立よりもガバナンスの能力，行政効率が重要とアピールしていたが，相手批判のボルテージも上がっていた。郝市政の批判はかなり詳細で，花博開幕イベントの花火の無駄使い，捷運文湖線の車両設計の悪さ，道路補修工事の効率の悪さ，南京西路ロータリー内屋台の再生の失敗，士林夜市の改修の遅れ，台湾大学前の改築された水源市場の４階が使われないまま放置されていることなど，細かすぎるかと思うほど具体的であった。少子化，学校の安全，老人大学など教育福利政策も時間をかけて説明した。蘇は，台北を美麗都市にする，自分ならそれができるとアピールして演説を終えた。

蘇は，2007年５月に予備選挙で謝長廷に敗北し行政院長を辞任してから2010年３月の台北市長選出馬までの間，充電・学習の時間があった。これは，毎日目先のことに追われる政治家にとって貴重なまとまった時間である。蘇はその間に，アイデンティティの戦いを薄め統治能力で勝負する中間路線を暖めてきた。五都選挙の民進党の五候補はいずれも中間路線を標榜しているが，蘇はまさに「領頭羊」のごとく斬新な手法で中間路線を牽引し，それを広くアピールする貢献をした。しかし，蘇の「超越晩会」には既視感もあった。1994年の台北市長選挙で「快楽・希望」の旗を立てた陳水扁の選挙集会とよく似ているのである。陳も演説がうまく，人を引きつける能力は抜群であった。違いは，陳のテーマ曲「春天的花蕊」が演歌調であったのに対し，蘇のテーマ曲「我們要

改変」はロック調であることなのだろうか。

この既視感は，民進党が勝つための選挙戦略は限られているということを示唆するかのようでもある。民進党の歴史は，大雑把に言うと，初期の民主化選挙の時期は台湾ナショナリズムを打ち出し，途中で陳水扁が中間路線に軌道修正を図り，その後政権担当中に徐々に台湾ナショナリズム寄りに移動したのを，今度は蘇がまた中間路線に引き戻すという大きなサイクルの中で動いているのかもしれない。それは，左右にゆれながら進化しているのか，それとも同じところをぐるぐる回っているだけなのか。台湾の選挙民の多くは陳が掻き立てた「希望」の結末を知っているだけに，この既視感が蘇にとって壁になる可能性があった。

蘇のテーマ曲は「我們要改変（我々は変革を必要とする♪）…人民是頭家（人民が主人♪）」というフレーズで始まる。在野にある民進党の支持者に「人民が主人」というフレーズは心地よく響くし，「人民が主人」の観点から馬や郝を批判することも効果的である。しかし，自らが政権に就いた時に，台湾の政治制度の中に「人民が主人」の理念をどう取り込んでいくのかについての議論は欠けている。蘇の選挙戦略には，他の政治家と同様に，まずは勝つこと，何をどう行なうかは勝って権力を握ってから，という発想が感じられる。これは，「オレに任せておけば大丈夫」という家父長制的政治家観に通じる。台湾では家父長制的政治家観が根強いので蘇の選挙戦略は間違いではないが，他方で，「人民が主人」は人民主権の理念であり，家父長制的政治家観とは対立する。選挙民がいちいち政治理論を議論するわけではないので，ムードをひたすら高めればそのあたりはあいまいにすますことができるのかもしれないが，政治参加のあり方，権力監視の方法など語れることは多々あるはずである。

新北市では，蔡英文と朱立倫の演説を聞き比べてみた。11月20日，樹林市（現在は区）で蔡の大型集会を観察した。樹林は藍緑が五分五分の地区である。民進党は4000人ほど収容できる会場を準備していたが一杯になり，途中で参加者

を詰めさせたが，それでも両脇は立ち見で，合計6000人くらいはいたのではないかと思う。司会は，蘇側近の呉秉叡と蔡側近の蕭美琴が仲良く務めた。ダンスパフォーマンス，市議候補の紹介をはさんで，応援演説は李應元，謝長廷，林義雄と進んだ。元民進党主席の林義雄は，他の政治家にはないカリスマ性がある。林が民主化運動に参加しその過程で家族が何者かに惨殺された事件はほとんどの民進党支持者が記憶している。また，林は権力欲が薄く早々と政治活動を退いたため清廉なイメージがある。このため林の演説は重みがあり，林が朴訥とした話し方で，娘を心配する父親のように「蔡をよろしく」と呼びかけると聴衆の感動を誘う。林が党歴の浅い蔡にお墨つきを与えるこのパフォーマンスは，蔡が総統候補になった場合，中南部でかなりの効果を上げると思われた。

蔡本人の演説内容は，政府の役割を強調する福祉国家路線であるが，メディアのインタビューの公式発言よりも演説では左派路線がより強調されていると感じた。低所得者向け「社会住宅」建設，雇用の確保，子供・高齢者への福祉供与拡大，社会的弱者にやさしいコミュニティ作りなどの社会福祉政策を次々に挙げ，中央政府がやらないなら五都からやっていくと語ったが，財源については一言も触れなかった。

11月21日，三重市で朱の演説を聞いた。これは，三重が地盤の市議候補陳幸進（台北県議会議長）との合同集会であった。朱が入場してきた時の女性支持者の声援はものすごく，人気が高かった時の馬を思わせる。県議会議長の動員系統なので偏りがあると思うが，30代40代以上と思われる女性支持者が多かった。候補をひと目見たいというこの雰囲気は，郝の場にはなく，朱にはあるのである。朱の選対本部関係者が，女性票の獲得に自信を示していたが[33]，それが裏づけられた形である。この関係者は，蔡の福祉政策で子供・母親・子育て支援が特に強調されているが，台北県では，蔡が独身であることを理由に違和感を抱く女性選挙民が少なからずいるという指摘をしていた。朱は演説が非

常にうまい。民進党批判はそれほど強烈ではないが，捷運建設，経済活性化など自分の政策を語り，聴衆の反応はよかった。閩南語がなめらかであるし，何より声が力強い。候補としての強さは十分感じられた。

それに対して蔡の演説は，力強さに欠け，平淡で大学の講義のようである。しゃべっているのが蔡でなければ眠くなるかもしれない。しかし，11月20日の蔡の集会は独特の雰囲気に包まれていた。台湾で女性政治家は珍しくないが，選挙を勝ち抜く女性県市長や女性議員らは強烈な個性を内に秘めた特有の外見と雰囲気を備えている。蔡の外見は，そうした女性政治家と比べると，いかにも普通の人という印象を免れない。蘇の演説はまったく安心してリラックスしながら聴いていられる。蘇が一人で自然に盛り上げてくれるからだ。

他方，蔡の演説は，彼女がちゃんと演説できるのか，十分盛り上げることができるのか何となく心配があり，聴衆に幾分の緊張感がある。実際，蔡は演説全部を閩南語で通すことができない。その分，聴衆が候補を盛り立てようという暖かい雰囲気がみなぎっていた。野外集会では人の出入りが多いのが普通だが，蔡の演説中は一体感があり，立ち上がって帰った人は少なかったと思う。集会参加者，特に前半分に座っている熱心な支持者は，「オレが・ワタシが主席を守る」という気持ちになっているように感じられた。若い女性も多いとは言えないが来ていたし，おばさんたちも熱心だったが，一番熱心なのは中高年のおじさんたちであった。初の女性党首ということで，支持者も新しい経験をしているのかもしれない。基礎票で差があり選挙活動でもやや遅れのあった蔡が終盤で風を起こした要因の一つは，候補として珍しいキャラクターにあったようである。

(3) 投票日直前

北二都の選挙戦を通じて，蘇と蔡が当選した場合総統選挙に出馬するのかしないのかの憶測・議論は絶えなかった。国民党は繰り返しこの点を突いた。10

月の『聯合報』の民意調査では，蔡が市長に当選したら任期を全うすると信じると回答したのが55％，任期途中で転進すると考えると回答したのが16％であった。もし蔡が市長に当選し途中で総統選挙に出馬することになれば，「受け入れられない」が51％，「受け入れることができる」は28％であった[34]。このことからわかるのは，蔡の誓約はあいまいであるが，多数の市民がそれなりに納得し，また，任期途中での総統選挙出馬は認められないと考えていたということである。蘇は「当選したら４年の任期を全うする。総統選挙には出ない」と繰り返し，議論に蓋をした[35]。

民進党の呉乃仁秘書長は，「五都のうち二都しか取れなければ負けだ。あえて手抜きをする候補がどこにいるか」と効果的に語り，蘇あるいは蔡が意図的に落選し総統選挙に出馬するという憶測を否定した[36]。しかし，選挙期間も残り３日を切った11月24日，呉秘書長は手痛い失言をした。呉は記者懇談会の場で，総統に当選する可能性の最も大きい人物が民進党を代表して出馬するであろう，党の規則には五都市長に当選した人物が総統選挙に出馬することを妨げる条項はない，という趣旨の発言をし，蘇あるいは蔡が市長当選後総統選挙に出馬するつもりだという印象を与えた[37]。呉は党内の総統候補決定のプロセスを質問されたので，客観的に説明しただけのつもりであったが，記者は聞き逃さなかった。この発言が蘇と蔡の選挙情勢に水を差したかどうかはわからないが，少なくとも，国民党側が最後の３日間の攻撃材料を得たことは間違いない。この記者懇談会のビデオを見ると，茶菓子がつきリラックスした雰囲気で質疑応答が行なわれている。呉秘書長はこの種の質問を十分注意していたはずであるが，あとわずかで選挙戦を終え自分の役目も終了するということで気が緩んだのかもしれない。

選挙戦最終日の夜，台北県永和市の国民党市議候補陳鴻源（台北県議会副議長）の選挙集会で銃撃事件が発生した。応援演説を始めようとした連勝文が地元のチンピラに銃撃され，銃弾が顔面を貫通し，連勝文は病院に搬送された。

事件は直ちに全国メディアで報じられ，人々を震撼させた。事件の被害者が連戰元国民党主席の息子であったため，北部では同情票が出て国民党にプラスに働き，逆に南部では民進党に票を結集させる動きにつながったようである。連勝文は軽傷で，数日後に退院した。検察は，約２ヶ月の捜査の結果，犯人の林正偉（48歳）は私怨により陳鴻源副議長を銃撃しようとしたが，人違いでステージ上にいた連勝文を銃撃したのが事件の真相であると発表し，林を起訴した。

『聯合報』と『中國時報』が選挙直後に行なった民意調査では，銃撃事件で影響を受けたと解答した人の比率はどちらの調査でも４％であった[38]。「影響を受けた人４％，うち国民党に票を入れた人２％，民進党に票を入れた人１％，その他１％」という『中國時報』の調査結果に基づいて人数を計算すると，影響を受けたのが42万7000人，うち国民党に票を入れたのが21万3000人，民進党に票を入れたのが10万7000人と大雑把ながら推測ができる。国民党に有利な票の動きが台北市と新北市で比較的多く現れたと仮定すると，銃撃事件の影響は，当落を変えなかったかもしれないが相当大きかったことになる。台湾では信頼のおける出口調査が行なわれていないので事件の影響を検証することは困難であるが，『聯合報』と『中國時報』の民意調査を参照すれば，事件がなければ郝と蘇との得票差，および，朱と蔡との得票差はもっと小さかったであろうと言ってよさそうである。

６．台北市の投票結果

台北市長選挙の結果は，《表３》のように，郝龍斌が約79万8000票，蘇貞昌は約62万8000票獲得した。投票率は70.65 ％であった。郝は苦しみながらも終盤で蘇を突き放し，約17万票の差をつけて再選をものにした。蘇の43.8％という得票率はどのような位置づけになるのか検討してみたい。この数値は，謝長廷の得票率40.9％を上回り陳の45.9％に近づけるという蘇陣営の当初の目標か

《表３》台北市長選挙結果

	得票率	得票数
郝龍斌	55.65％	797,865
蘇貞昌	43.81％	628,129
その他３名	0.54％	7,742

（出所）中央選挙委員会

らすると悪くないように見える。目標には届いたのである。しかし，選挙のプロセスにおいて蘇陣営の選挙戦略がうまくいき期待値が高まっていたので，支持者の間では達成感は薄い。約17万票の差は予想外の大差であった。

台北市内の12区別の蘇の得票構造を分析してみる。蘇の得票率が最も高かったのは大同区の57.6％，最も低かったのは文山区の34.3％である。これを前回の謝長廷の得票率と比較してみたい。《表４》は，今回も含め５回の台北市長選挙における民進党候補の得票率の推移を市内の12区別に示し，蘇の得票率の高い順に並べたものである。2006年の謝の得票率の最大は大同区の56.3％，最小は文山区の30.6％で，蘇の場合と同じである。それだけでなく，12区の謝と蘇の得票率の順位はまったく同じである。蘇の得票率は謝と比べて2.9ポイント上昇したが，各区の得票率もそれに対応して上昇しただけである。投票率が６ポイントも上がったというのに，たいした変化は見られない。

選挙前に蘇陣営が期待をかけていたのは内湖区・南港区であった。この両区は再開発が進み，ハイテク・情報通信関連の企業が数多く進出し，町並みは一変した。流動人口が増え，国民党の組織力が及ばない中間票が増えていると見られていた。謝の得票率と比べて南港区での蘇の上昇幅は3.9ポイント，内湖区は2.9ポイントであった。南港区の上昇幅は確かに12区で最大であったが，蘇陣営が期待したほどではなかった。蘇の選挙活動は，謝のそれよりはるかに綿密で，期間も長く，運動それ自体としては成功していた。謝の出馬の決断は臨時のもので，準備は出遅れ，選挙活動も当時の「倒扁運動（陳水扁の辞任を

《表４》台北市長選挙における民進党候補の各区得票率

	1994年	1998年	2002年	2006年	2010年
候補者	陳水扁	陳水扁	李應元	謝長廷	蘇貞昌
大同区	59.46%	59.00%	48.65%	56.27%	57.63%
士林区	50.95%	52.19%	42.40%	48.60%	50.93%
萬華区	48.46%	49.68%	40.12%	46.45%	49.70%
北投区	48.02%	49.39%	39.37%	45.41%	48.65%
中山区	48.96%	50.04%	40.17%	45.50%	47.41%
南港区	43.50%	46.29%	34.26%	40.51%	44.39%
内湖区	41.86%	43.92%	33.46%	38.37%	41.25%
松山区	41.32%	44.88%	34.99%	38.13%	40.49%
中正区	39.18%	42.60%	33.06%	36.86%	40.21%
信義区	38.11%	41.81%	31.69%	36.62%	39.91%
大安区	35.99%	40.31%	31.08%	34.24%	37.49%
文山区	34.03%	36.39%	26.75%	30.64%	34.29%
全　体	43.67%	45.91%	35.89%	40.89%	43.81%

（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

求める運動)」に押されていた。相手は同じ郝であるが，今回は満足度が低迷し現職の重荷を背負った候補者であった。これらのことを考慮すると，蘇の伸びは「わずか」2.9ポイントであったという見方にならざるをえない。

次に，蘇の得票を民主化の出発選挙となった1994年の陳の得票と比較してみる。蘇の得票率43.8％は，陳の43.7％とまったく同じである。角度を変えると，郝の得票率55.7％は，当時の国民党候補黄大洲と国民党から分裂して結成された新党の候補趙少康の得票率の合計56.1％とほとんど同じである。12区別で見ると，陳の得票率の最大は大同区，最小は文山区で，これも蘇と同じである。順位に変動があったのは1994年に３位であった中山区が５位になっただけである。今回の蘇と1994年の陳とは，得票率が同じであるだけなく，各区の得票構造もほとんど同じである。

５回の市長選挙を通してみると，馬人気が絶頂であった2002年に李應元の得票率が大きく落ち込んでいるが，それでも民進党候補の得票率は10ポイントの範囲内に収まり変動は限られている。民進党候補の各区の得票率の傾向は，最大の大同区から最小の文山区の枠の中で毎回ほぼ同じである。台北市はこの16年間，都市の再開発が進み，新しいマンションが建ち，住民の移動もあり，社会的には大きな変貌を遂げてきたが，各区の投票パタンは驚くほど固定化している。そしてこの16年間，周知の通り，台北市長選挙では陳水扁の当選・落選という大きな出来事が発生したし，中央レベルでは初の民進党政権の登場と国民党政権の復活という大きな出来事があった。台北市長選挙は，そうした社会的・政治的変動がまるでなかったかのように，ぐるりと一回りして1994年のスタート地点に戻ったように見える。

市長選挙で藍緑支持構造が固定化していることはわかったが，台北市の政治変動の有無を検討するため，もう一段踏み込んで市議会議員選挙の動向も検討しておきたい。市議員の選挙は，中選挙区制度のため理論上無党籍候補の存在空間がある。市議員選挙では国政上の争点が薄まるので，固有の支持層の外では政党帰属意識に基づく投票行動は薄まる。無党籍の候補者でも，個人票・浮動票を獲得できれば十分当選できる。選挙民からすると，藍緑対決となる市長選挙に比べて市議員選挙の方が，選択肢が多い。各党の公認候補は，中間票・浮動票の獲得も重要であるが，まずは組織票あるいはその党の忠実な支持者を固めようとする。そのため市議員選挙での各党公認候補の得票率は，各党の基礎力がある程度反映されていると見なすことができる。

過去５回の市議員選挙の各党得票率を，泛藍，泛緑，無党籍その他にまとめたものが《表５》である。泛藍陣営の各党の得票率の合計は，1994年の60.8％から2010年の54.8％へと５ポイント低下した。一方，泛緑陣営の各党の得票率の合計は，1994年の30.1％から2010年の39.0％へと約９ポイント上昇した。市議会議員選挙の得票率で見ると，泛藍はゆるやかではあるが低下のトレンド，

《表５》台北市議員選挙における藍緑陣営得票率

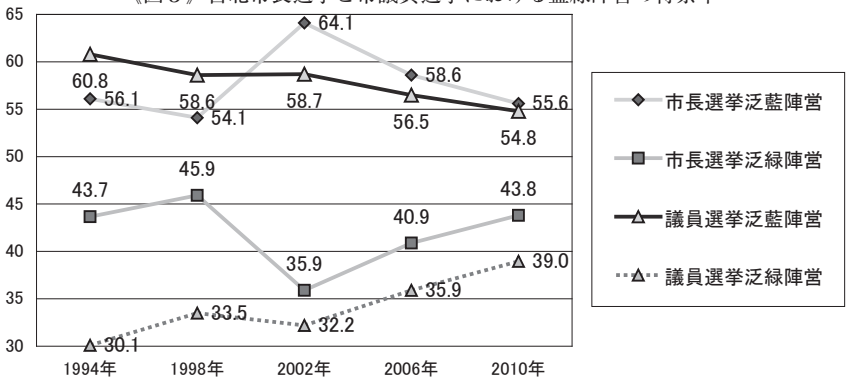
	1994年	1998年	2002年	2006年	2010年
泛藍陣営	60.8%	58.6%	58.7%	56.5%	54.8%
泛緑陣営	30.1%	33.5%	32.2%	35.9%	39.0%
その他	9.1%	7.9%	9.1%	7.6%	6.3%

（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

泛緑は上昇のトレンドにあると言える。国民党だけを見れば前回に比べてわずかながら得票率が増えたが，新党と親民党の得票率が減少したので泛藍陣営としては低下のトレンドが止まらなかった。泛緑陣営のうち民進党に絞ってみると，その得票率は前回と比べて5.6ポイントも伸びた。民進党は党勢回復どころか，台北市の基礎票が党史上最大となったのである。大きな注目を集める市長選挙では泛藍陣営優位の構造が続いているが，それほど目立たない市議員選挙では泛藍陣営低下の傾向が観察できる。これがトレンドとして成立するのであれば，海底の深いところでの変化がいずれ海面にも現れるであろう。

市長選挙と市議員選挙における泛藍陣営と泛緑陣営の得票率のグラフを重ねたものが《図３》である。これにより，両陣営の基礎票と，浮動票も含めた広い支持とを見分けることが可能になる。1994年を例にとると，泛緑陣営（当時は民進党のみ）の市議員選挙の得票率は30.1%にすぎないが，市長選挙の陳水扁の得票率は43.7%に達している。この差13.6ポイントは陳が獲得した中間票・浮動票であり，当時の陳の強さを現している。1998年も陳が基礎票を12.4ポイント上回り，かなりの中間票・浮動票を獲得した。逆に，泛藍の市長候補は陳に票を奪われ，基礎票を固めることもできなかった。1998年の馬英九もそうである。2002年は馬が中間票・浮動票を獲得した。2006年は郝龍斌と宋楚瑜の得票率を合計しても泛藍陣営の基礎票を少し上回ったにすぎない。2010年の郝の得票率は基礎票とほとんど同じである。郝陣営の選挙戦術が基礎票固めに集中していたことがこのグラフでも確かめられる。投票日前日の銃撃事件がなけれ

《図３》台北市長選挙と市議員選挙における藍緑陣営の得票率



（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

ば，あるいは郝の得票率は基礎票を下回ったのかもしれない。

陳水扁以降，泛緑陣営の基礎票への上乗せは，李應元が3.7ポイント，謝長廷は5.0ポイントであった。蘇が今回上乗せしたのは4.9ポイントで，謝と変わらない。民進党の市議候補らの間では郝と馬を強烈に批判し藍緑対決構造の中で票を固めようという選挙戦術が多かったのに対し，蘇は中間路線にシフトし中間票・浮動票を集めようとした。このことを考慮し，筆者は，蘇の上乗せ幅は謝より大きくなるとの仮説を立てたが，結果はそうはならなかった。数字の上では，蘇の中間票・浮動票獲得能力は特に高くはなかったことになる。ただし，これはあくまでも台北市での検証である。台北市は中間票・浮動票の割合が小さいということもある。台北市議員選挙における無党籍その他候補の得票率の合計は毎回10％に満たないので，台北市では藍緑の政党対決構造が相当深く浸透し，その分中間票・浮動票の総量は限られているということが言える。新北市では無党籍その他候補の得票率の合計は21－28％の間にあるので，台北市の中間票・浮動票の割合は新北市より小さいということになる。

7．新北市の投票結果

新北市長選挙の結果は，《表６》のように，朱立倫が約111万票，蔡英文が約100万票を獲得し，その差は約11万票という激戦であった。投票率は71.3％であった。朱は蔡にかなり追い上げられたが，基礎票の差に助けられ当選をものにしたと言える。蔡の47.4％という得票率はどのような位置づけになるであろうか。この数字は，前回の羅文嘉と比べて3.1ポイントの上昇で，蘇が再選された時の51.3％にはおよばないが，それに次ぐ好成績である。

郷鎮市レベルの得票構造を見るため《表７》を作成した。これは過去３回の台北県長選挙および今回の新北市長選挙における民進党候補の得票率を29の郷鎮市（昇格後はすべて区に編成替えされた）別にまとめ，さらに蔡の得票率の高い順に並べたものである。郷鎮市で蔡の得票率が最も高かったのは茶畑が広がる坪林郷（区）の63.1％，最も低かったのは都市化が進む新店市（区）の34.3％であった。前回と比べた伸び幅が最も大きかったのは北部海岸沿いの漁村・農村が広がる金山郷（区）の8.8ポイント，次いで萬里郷（区）の7.4ポイントであった。過去４回の民進党の郷鎮市別の得票率は，坪林郷が最も高いのは変わらないが，2001年の蘇再選時の投票行動が攪乱要因になっていて，全体としてみると変動が大きい。

新北市は，面積は広いが人口が少ない地区と人口密集地区とが混在する。選挙の当落という観点から見ると，影響が大きいのはどうしても旧台北県時代の

《表６》新北市長選挙結果

	得票率	得票数
朱立倫	52.61％	1,115,536
蔡英文	47.39％	1,004,900

（出所）中央選挙委員会。

《表７》新北市長選挙の民進党候補の各区得票率

	1997年	2001年	2005年	2010年
候補者	蘇貞昌	蘇貞昌	羅文嘉	蔡英文
坪林郷	55.05%	77.39%	60.62%	63.05%
貢寮郷	58.81%	64.60%	55.89%	60.89%
石碇郷	47.33%	65.51%	56.08%	59.50%
蘆洲市	50.32%	60.75%	52.95%	56.23%
三重市	49.26%	60.45%	53.43%	55.30%
平溪郷	40.96%	64.13%	48.95%	53.85%
五股郷	37.11%	57.20%	49.40%	52.97%
新莊市	47.08%	57.69%	50.08%	52.94%
金山郷	42.21%	60.58%	44.09%	52.89%
鶯歌鎮	44.86%	59.82%	48.37%	51.58%
樹林市	48.57%	56.94%	49.11%	51.32%
板橋市	45.13%	54.53%	47.40%	50.29%
泰山郷	40.01%	54.63%	46.97%	50.21%
雙溪郷	45.24%	56.59%	46.47%	49.41%
土城市	44.66%	51.26%	44.60%	48.97%
八里郷	38.65%	54.30%	46.26%	48.94%
三峡鎮	42.66%	56.53%	45.45%	48.35%
萬里郷	36.76%	54.69%	40.82%	48.19%
深坑郷	37.94%	48.10%	43.04%	46.58%
林口郷	42.29%	56.35%	45.47%	46.36%
瑞芳鎮	40.42%	52.15%	41.86%	46.30%
石門郷	31.12%	59.55%	40.84%	45.48%
三芝郷	21.53%	61.42%	41.18%	45.37%
淡水鎮	32.47%	54.05%	43.16%	45.17%
汐止市	25.51%	44.12%	40.17%	43.29%
中和市	34.08%	42.00%	36.70%	39.93%
烏來郷	32.35%	52.43%	34.94%	36.10%
永和市	30.57%	36.98%	31.84%	34.41%
新店市	29.83%	35.82%	30.88%	34.27%
全　体	40.67%	51.31%	44.30%	47.39%

（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

10市（現在は区）になる。これらの区は選挙人数12万人以上で，10区だけで新北市の選挙人総数の８割を占める。これら10区は地理的に，①グループ（蘆洲，三重，新莊），②グループ（樹林，板橋，土城），③グループ（汐止），④グループ（中和，永和，新店）の４つのグループに分けることができる。①は雲林県など中南部からの移住人口が多く民進党の地盤である。②は中間票が多い地区である。④は軍・公務員・教員関係者が多く国民党の固い地盤である。蔡は，①で勝ち越し，②で五分五分，③で負け越し，④で大きく負け越した。朱は，④だけで蔡に対し約13万8000票もの差をつけた。一方，蔡が①で朱につけた差は約４万9000票であった。蔡からすると，④での負け越し幅が大きすぎ他ではカバーし切れなかったということになる。朱からすると，④で蔡陣営の侵入を防いだことが当選につながったと言ってよい。この④の国民党支持の堅固さは，台北市での文山区・大安区の固さと共通する。どちらも，投票行動はほとんど変化していない。流動性の高い②で蔡が五分に持ち込んだことは，蔡陣営の中間路線とイメージ重視の選挙戦術の効果であったと見ることができる。

市議会議員選挙での藍緑陣営の得票率はどうなっているであろうか。《表８》で，過去３回の台北県議員選挙と今回の新北市議員選挙での両陣営の得票率を整理した。泛藍陣営の得票率は，1997年の55.4％から2010年の42.6％へと12.8ポイント低下した。一方，泛緑陣営の得票率は，過去３回は足踏み状態であったが，今回は大幅な上昇を見せた。すなわち，1997年の22.0％から2005年の24.6％を経て，2010年の36.3％へと14.3ポイント上昇した。泛藍陣営は，下降

《表８》新北市議員選挙における藍緑陣営得票率

	1997年	2001年	2005年	2010年
泛藍陣営	55.4％	51.7％	47.5％	42.6％
泛緑陣営	22.0％	22.6％	24.6％	36.3％
その他	22.6％	25.7％	27.9％	21.2％

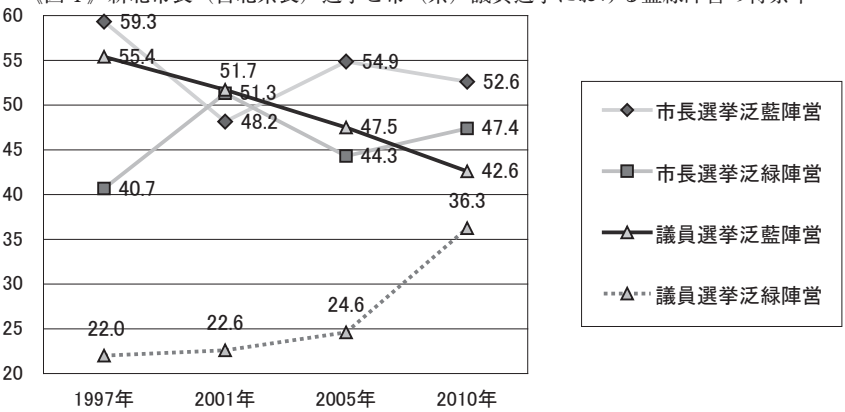
（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

のトレンドが確認できる。泛緑陣営は，今回の上昇幅が突出しているので，上昇傾向にはあるが流動性が大きいという判断に止めておきたい。

国民党だけを見ると得票率は前回の38.1％から39.7％へと微増したが，新党と親民党の減少幅をカバーすることはできなかった。これは台北市と同じ構図である。民進党の得票率は，前回の21.4％から34.6％へと13.2ポイントも上昇し，台聯の1.5ポイント減少をカバーして余りあった。民進党は，新北市においても，議員選挙で測られる基礎票が党史上最大となった。議席数では，国民党が前回の28議席から30議席へと横ばいであったのに対し，民進党は16議席から28議席へと躍進した。親民党（前回５），台聯（前回３），新党（前回０）のいずれもが議席を獲得できなかった。無党籍その他は，前回の13議席が８議席に減少した。議席総数は，前回の65から１議席増え66である。中選挙区制という選挙制度は変わらないのに小政党が敗北し無党籍候補が減少したことは，新北市において二大政党の対決構造が強まったことを示す。

台北市と同じように，新北市についても市長選挙と議員選挙の両陣営の得票率グラフを重ねてみたい。この《図４》は，台北市の《図３》と比べると，泛緑陣営の市長選挙と議員選挙の２つのグラフの間隔が大きい。これは，いくつかの要因を指摘できる。①台北県の社会構造の流動性が高いため中間票・浮動票が多く存在する。②台北県では，議員選挙においては二大政党対決構造があまり浸透していなかった。③他県市にも共通することであるが，台北県での民進党の基礎力が弱かった。④台北県は無党籍の地方政治家族出身の議員が多くいたので，その票が市長選挙では中間票・浮動票となり，民進党が比較的多く獲得できた。特に蘇貞昌の中間票・浮動票獲得能力は傑出していて2001年の再選時は泛緑の基礎票に28.7ポイントも上乗せした。これらの要因が複合し，台北県時代は泛緑の市長選挙と議員選挙の得票率グラフの間隔がひらいていたと考えられる。ところが，今回はその間隔が一挙に縮まった。基礎票に対する蔡英文の上積み幅は，蘇貞昌や羅文嘉と比べてかなり小さい。一方，朱立倫は，

《図４》新北市長（台北県長）選挙と市（県）議員選挙における藍緑陣営の得票率



（出所）中央選挙委員会の数字に基づき筆者作成。

泛藍陣営の基礎票が下降トレンドにある中，候補の魅力により中間票・浮動票を上積みしたと言える。

この現象については，筆者の現地調査が不十分で推測にならざるをえないが，蔡の中間票・浮動票獲得能力が低かったという仮説を立てるよりも，蔡が新北市における民進党への注目度を高め基礎票を引き上げたという仮説を立てた方がうまく説明できる。今回の民進党市議候補は，元立法委員が出馬したり話題の多い女性候補が出馬したりで，確かに注目を集めたが，個々の候補のがんばりで党の得票率が大幅に伸びたとは考えにくい。大きな背景としては，馬政権への失望，周県政への不満などが民進党市議候補の追い風になったと考えられるが，これだけの急上昇を説明するにはやはり不十分である。

これは，党主席である蔡が市長選挙を戦ったことで民進党への注目が特に増し，地方政治家族候補らの弱い票を吸収し民進党公認候補の得票を引き上げたと考えた方が実態に合うのであろう。台湾では有力な県市長候補が県市議候補の得票を引き上げる現象を親鴨と小鴨の比喩を使って説明するが，蔡主席はま

さに「小鴨」を安全なところに連れていく「親鴨」の役割を果たしたと言うことができる。これは，蘇貞昌再選の時でさえ見られなかった現象である。2001年，蘇は大量の中間票・浮動票を獲得したが「親鴨効果」は数字の上では確認できない。

まとめ

市長選挙は，それぞれの候補者の強弱とローカル・イシュー，それに全国レベルの政権への評価が複雑に絡み合った結果である。北二都の市長選挙で，郝龍斌と朱立倫は，経済成長率の上昇や ECFA の締結など馬政権の実績を訴えたが，その効果は限定的であった。蘇貞昌と蔡英文は，格差の拡大などで馬政権を批判し一定の手ごたえをつかんだが，訴えの中心は，候補の人柄，統治能力，ローカル・イシューにあり，中台関係は選挙の争点にはならなかった。蘇は台北市で創意あるユニークな選挙戦を展開したが，その効果は薄く，台北市の政党支持構造の長期安定が浮き彫りになった。

2012年総統選挙は，蔡英文が馬英九と戦うことになった。市長選挙のプロセスにおいて駆け引きの弱さを露呈した蔡と，権力保持の駆け引きに巧みな馬とでは馬に分があるように見えたが，蔡には新北市長選挙で示されたように従来の民進党指導者とは異なる魅力があり，馬としてはやりにくい相手であることが示された。蘇と蔡の選挙結果を分析すると，蘇の得票構造は従来の民進党の得票構造そのままであるのに対し，蔡のそれは「爆発力（枠を突き破るエネルギー）」を内包するパタンであった。民進党が蔡を総統候補に選んだ理由がここから明らかになる。他方，国民党は蘇と蔡を落選させ二人を予備選挙で競わせる状況を作り，これが国民党に有利に作用した。民進党は予備選挙で党内がぎくしゃくし，党の活力と団結のアピールがなかなかできなかった。

北二都の市長選挙は国民党が底力で逃げ切ったが，市議員選挙では泛藍陣営

の低下トレンドが観察された。北二都の市長選挙は，地方の政党支持構造の中で変わらない部分と変化する部分の両方を浮かび上がらせた。それは，表面的にはめまぐるしい展開を見せる2012年台湾総統選挙を解読するカギとなる。

1　五都選挙が行なわれることになった経緯については小笠原欣幸「五都市長選挙の概況」(http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/analysis/fivecitieselection2010a.pdf）を参照。

2　国民党のシンボルカラーが藍色であることに由来する。泛藍陣営には，国民党の他に親民党と新党という２つの小政党がある。

3　民進党のシンボルカラーが緑色であることに由来する。泛緑陣営には，民進党の他に台湾団結聯盟（略称：台聯）という小政党がある。

4　過去の台北市長選挙および台北県長選挙に関する研究は以下のものがある。徐火炎「一九九八年二屆台北市長選舉選民投票行為之分析：選民的黨派抉擇與分裂投票」『東吳政治學報』第13期，2001年。陳憶寧「2001年台北縣長選舉公關稿之議題設定研究：政治競選言説功能分析之應用」『新聞學研究』第74期，2003年１月。周玫楓，左宗宏「以『沈默螺旋』理論探討2001年台北縣長選舉選民對候選人認知與台灣前途的表達意願」『傳播與管理研究』第３巻第１期，2003年７月。吳秀光「北高市長選舉結果與民意調査間的弔詭」『臺灣民主季刊』第３巻第４期，2006年12月。蕭怡靖，游清鑫「施政表現與投票抉擇的南北差異—2006年北高市長選舉的探討」『臺灣民主季刊』第５巻第２期，2008年６月。Chia-hung Tsai, Ching-hsin Yu, Chi Huang, Lu-huei Chen, and Su-feng Cheng, “Examining Strategic Voting in Single-Member Districts: A Case Study of the 2006 Taipei City Mayoral Election,” *Japanese Journal of Electoral Studies*, No.23, 2008.

5　本稿における候補者の年齢は，立候補登録時期にあたる2010年９月時点でのものである。

6　「二〇一〇年廿五縣市城市大調査」『天下雜誌』455期，2010年９月。

7　政権与党関係者Ａ氏へのインタビュー（2009年７月17日）。

8　「逐鹿新北市本報新民調蘇貞昌獨霸 略勝朱立倫」『中國時報』2010年２月７日。

9　「周錫瑋挺朱立倫 不選新北市」『聯合報』2010年２月22日。

10　「本土的眷村孩子 朱立倫從小很雞婆」『TVBS NEWS』2010年10月18日（http://www.tvbs.com.tw/news/news_list.asp?no=yehmin20101018151615)。

11　「新聞幕後／馬朱合體勸進 民調決勝勸退」『聯合報』2010年２月13日。

12 「新北市民調／蘇貞昌44％ 朱立倫38％」『聯合報』2010年２月24日。

13 民進党内で陳水扁の次に位置した蘇貞昌，謝長廷，游錫堃，呂秀蓮の４人の実力者を指す。

14 「蘇嘉全：蔡英文意在黨主席 不選５都」［中央社］2010年３月24日。

15 「談判專家變『非典女黨魁』 解構蔡英文」『TVBS NEWS』2010年10月19日（http://www.tvbs.com.tw/news/news_list.asp?no=blue20101019145212）。

16 「蘇貞昌：不主張遷松山機場」『中國時報』2010年６月16日。

17 「搶攻中間票 蘇貞昌到你家」『中國時報』2010年８月29日。

18 「郝龍斌點火：基層公務員應加薪」『中國時報』2010年８月22日。

19 「郝團隊太輕忽 花價之火燒到選情」『中國時報』2010年８月28日。

20 呂紹煒「挽民心 郝團隊當自強」『中國時報』2010年９月６日。

21 「首都苦戰 藍昭順16字訣止血」『聯合報』2010年９月８日。

22 「趙少康：輸掉北市 總統大選難逆轉」『中國時報』2010年９月７日。

23 本来「輪転新北市」であるが「輪」と朱立倫の「倫」の発音が同じなので語呂合わせをしている。

24 「從政背景相似 朱立倫、蔡英文 陸軍打空軍」『聯合報』2010年８月24日。

25 国民党系の人物は面会したことを知られたくないので蔡陣営は非公開活動とし訪問先を発表しなかった。

26 林雪芬「蔡英文『不擾民』雨天休兵」『新新聞』1234期，2010年10月28。

27 民進党台北県党部主任委員呉秉叡へのインタビュー（2010年11月20日）。

28 「綠2012人選 小英提４條件」［中央社］2010年10月29日。

29 朱立倫選対本部関係者Ｂ氏へのインタビュー（2010年11月19日）。

30 TVBS民意調査中心関係者Ｃ氏へのインタビュー（2010年11月19日）。

31 蘇貞昌台北未来弁公室文宣部主任李厚慶へのインタビュー（2010年11月19日），民進党台北県党部主任委員呉秉叡へのインタビュー（2010年11月20日），陳菊競選弁公室主任洪智坤へのインタビュー（2010年11月18日）。

32 国民党台北市党部主任委員潘家森へのインタビュー（2010年11月19日）。

33 朱立倫選対本部関係者Ｂ氏へのインタビュー（2010年11月19日）。

34 「聯合報民調／不滿意度 朱立倫低於蔡英文」『聯合報』2010年10月30日。

35 「台北市／蘇貞昌：選贏市長就不選總統」『聯合報』2010年８月16日。

36 「呉乃仁：保２就算輸誰敢選假的」『中國時報』2010年10月28日。

37 「呉乃仁：誰最可能當選 誰就出線選總統」『聯合報』2010年10月25日。

38 「聯合報民調／五都一役36％綠勝 24％藍贏」『聯合報』2010年11月29日，および，

「本報民調 5都選擧結果 半數國人滿意」『中國時報』2010年11月29日。

［付記］本稿投稿後，匿名の査読者から貴重な修正意見をいただいた。拙稿に多少とも改善が見られたとすれば，この匿名査読者のおかげである。記して謝意を表したい。